

St. Luke's International University Repository

Providing Life Space for all Generations.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 惣万, 佳代子, Soman, Kayoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00015017

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



世代を超えた生活の場の提供

Providing Life Space for all Generations

惣 万 佳代子¹⁾

I. はじめに

特定非営利活動法人デイスサービスこのゆびと一まれは1993年、富山赤十字病院に勤めていた看護師3人が開所させた。従来の宅老所の枠を広げ、赤ちゃんからお年よりまで、障害があってもなくても利用可能にした。1998年富山県は私達の活動にあわせ、縦割り行政を超えて、2つの助成制度を1つの施設にだぶらせて補助金を出した。のちに縦割りを取っ払った「富山型デイスサービス」と呼ばれる活動の開始である。

宅老所は「住民参加型福祉」をつくり出し、地域に密着した活動へと発展している。今回はこのゆびと一まれの14年間の活動を振り返り、小規模・多機能ケアの意味と役割について述べるとともに地域ケアにおける看護職の役割と可能性について述べたい。

II. 誰もが地域で共に暮らす

日本の福祉施設はお年よりだけで100人・200人が住んでいる。知的障害者施設は500人が住んでいる。同じような人達だけを集め、一つの村をつくってはいけないと14年間、言い続けている。

その集団は異様であり、お互い相乗効果がないからである。豊かな人間関係のなかで人は育ち、喜びも大きい。一人ひとりが輝く。

III. みんなが一つ屋根の下で過ごすことは日本の文化である

このゆびと一まれには県外から年間2,000人以上の見学者が訪れる。「最先端のことをしたねえ」とよく言われるが、私達のしてきたことは最先端なことをしたのではなく、あたり前・普通の生活をしているだけである。赤ちゃんからお年よりまで一つ屋根の下で過ごすことは日本の文化である。「共生」とはどんな人でも排除しないで包みこむことである。

IV. なぜお年よりと子供や障害者が共に過ごすことがよいのか

認知症のお年よりが赤ちゃんをおんぶする。お年よりがおんぶひもをかけたのである。昔取った杵柄である。

6ヶ月の赤ちゃんの顔を見て「あれえ、あんたも歯ないがけえ。婆ちゃんみたいに入れ歯つくられ」。

2歳の子供が家で夕食の時、「松風そよぐ〜」と三橋美智也の「古城」を唄う。20歳代の母親が「私が知らないのに、どうしてこの子知ってるがけえ」と驚く。

認知症のお年よりも、一方的に介護されるだけではだんだん気落ちしていくであろう。

お年よりがこれでもできる、あれもできるとなれば、生き生きする。「人の役に立っている。自分にできることがいくつもある。という意識をもつように働きかける」そのことがケアの重要なポイントである。

マズローの「自己実現」は認知症のお年よりであっても障害者であっても、介護する私達であっても、人間が等しくもつニーズである。

V. このゆびと一まれで亡くなったお年より

14年間の活動で、このゆびと一まれがターミナルに関わり、亡くなった事例は6事例である。2事例を紹介する。

1. キヨさん

キヨさんは1993年10月から7年4ヶ月間通所した。きっかけは徘徊のため警察に何回かお世話になって来た。食べ物かどうか区別がつかなくなり、家で最初に食べたのはノリの乾燥剤だった。このゆびと一まれでは洗面所に置いてある手を洗う固形石鹸を食べた。

1997年病院の医師から左乳がんを指摘され、手術をしないと後6ヶ月の命だと宣告された。長男は手術をしないと決断する。

キヨさんは余命6ヶ月と言われながら、その後3年6ヶ月生きることができた。2001年1月1日AM5:39に亡くなった。亡くなる2週間前には大好きなゆうき君

1) 特定非営利活動法人デイスサービスこのゆびと一まれ理事長

(2歳)が布団に入ってくると自分から起きだして「足冷たいぜえ」と言って靴下をはかせた。

人間というのは最後まで大好きな人に対し何かしてあげたいという気持ちがあるのだと思う。キヨさんは亡くなる5日前から寝泊りして亡くなった。12月31日の夕食も口から食べていた。だから点滴など1本もせずに亡くなった。

2. タカさん

タカさんは認知症のため1995年3月から8年4ヶ月来られ、2003年7月4日に亡くなった。私と西村(副代表、看護師)が添い寝をして畳の上で大往生した。

亡くなる16日前に心房細動があり、救急車で病院に運ばれる。医師は「命が危ないICUに」。すると、タカさんは「先生、家に帰らして下さい」と強く要望した。結局、入院しないでこのゆびと一まれに来た。

亡くなる10日前に口から物が食べることができなくなった。かかりつけ医の指示により500mlの点滴をしようとする、タカさんは「ありがたくないです」と言った。このまま何もしないで死なせて欲しいと懇願した。それなのに私達は500mlの点滴を5時間15分かけてした。

その後、死ぬまで10日間あり、口から食べることはできなかったが、点滴をしないで見守った。亡くなる5日前にタカさんは「砺波の家に帰りたい」と言った。タカさんの生まれた家に帰りたいと言いだしたのであ

る。富山市にお嫁にきて70年以上も経っている。長男が「母ちゃん、その家、もう代が変わってないわ」と言うと、わかったとうなずき、そのまま眠っていった。その後一度も砺波に帰りたいと言わずに亡くなった。タカさんは「あの家がないのなら、じゃー私はこのゆびと一まれで死ぬんじゃ」と腹を決めて下さったのではないかと感謝している。

VI. おわりに

やりたい介護がとことんやれる、自分の判断で行うことができるから介護現場はおもしろい。このゆびと一まれは制度があって活動したのではなく、町にニーズがあって活動し、後から制度がついてきた。赤十字の理念である「明日の100人を救うより、今日の1人を救え」という、今、目前に困っている1人の人への全力投球は私達の活動を支えてきた言葉のひとつでもあった。

今後、さまざまな地域の介護現場で、看護師がリーダーシップをとり、働いていくことによって、質の高い介護が必要な人々に提供できると思う。誰もが、いつでも、いつまでも、安心して過ごせる町づくりを考えねばならない。地域ケアにおいて看護師がこれからのいよいよ重要な役割を果たしていくであろう。